



Title	W. モンセレウスキーの<よきサマリヤ人>解釈史的研究について
Author(s)	三枝, 礼三
Citation	基督教学, 6, 19-22
Issue Date	1971-07-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46268
Type	journal article
File Information	6_19-22.pdf



W・モンセレウスキーの
 〈へよぎサマリヤ人〉解釈
 史的研究について

三 枝 礼 三

一、序 説

一九六七年、イエスの譬えの解釈史的研究の意図から私は、〈へよぎサマリヤ人〉の譬えについて一三〇枚ほどの論文を書いた（北星女子短期大学紀要）。そのモティーフは、ユーリッヒヤーによって葬り去られてしまった教父たちの寓意的解釈の底に秘められていたキリスト論的視点を回復することにあつた。

ところが、その同じ年に、地球の裏側で全く同名の研究がモンセレウスキーによって発表されていたことを最

近知つた。しかも、そのモティーフは、私のそれとは全く対立して、この譬えのキリスト論的解釈の虚妄性を歴史的に証明することにある。事実、その序論においてこの譬えに対する現代の問題の解釈として取上げられているのは、彼のいわゆる“christologische”な解釈である。しかも彼は、それらの疑わしいキリスト論的解釈を今日に誘発した元兇を K. Barth に見て、キリスト論的なその巨大な影を、少なくともこの譬えからは排除しようとしているのである。

以上が、私のこの研究を取上げずにいられない理由である。但し、その際、彼のいわゆる〈キリスト論的〉解釈とは、「キリストをこの譬えの中の人物の一人と同一視しようとする解釈、即ちその中心部においてキリストとサマリヤ人乃至傷ついた旅人との同一化が行なわれる解釈だ」という定義に予め留意しておく必要がある。

二、教父時代

さてモンセレウスキーは、その解釈史を教父時代、スコラ主義時代、宗教改革と対抗改革の時代、十八・九世

紀、ユーリッヒャー以後の五期に分ち、丹念に検証している。しかしここでは、教父時代と宗教改革期とユーリッヒャー以後の三期に重点をおいて紹介するよりほかはない。

I、教父時代 1) 譬えに言及したマルキオンの反対命題に関する断片にこうある、「マルキオン曰く、われらの主は女から生まれたのではなく、却って創造者の領域から忍び出てくんだり、最初にエルサレムとエリコの中に、姿形は人の子にそっくりでありながら、われらの肉体を持たない姿で顕われた」。他方、明らかに教父時代の資料に基づくルカ一〇・三〇以下の若干の解釈中に、

「マリヤから肉を受取ったキリストなるサマリヤ人」(ἐκ τῆς Μαριάμ ἀρπάρα φερόμεναι) という一見不可解なことばが見出される。しかし、両者を対応したことばとして読むなら、マルキオンが、ルカ一〇・三〇以下に関連して、主の肉体を持った誕生を反駁していたという記憶が相当早い時期からあったことが明らかになる。

2) 十一世紀のカタリ派の神学者モネタの残したルカ一〇・三〇と三三の解釈は、旅人とアダム、強盗と・霊

と光を奪い去る悪霊乃至天体を同一視するグノーシス主義の遺産と寓意的解釈をそこにだけ残している。してみると、寓意的解釈は、早い時期のグノーシスの中に既に見出されることになる。

3) それは、ローマを去ってグノーシスへ走ったタチアノスにまでさかのぼれる。タチアノスは、この譬えの〈強盗〉を悪霊と、サマリヤ人をロゴスと同一視していた。従ってタチアノスは、何れにせよキリスト論的理解を代表していたと言える。そこでわれわれは、ルカ一〇・三〇と三七に関するキリスト論的解釈と、その解釈が明らかにグノーシスの影響下にあったことの証拠を、タチアノスがローマを去った一七二年以後の間もない時期に持っているわけである。

教父時代の譬えの本格的解釈はイレナイオス以後であるが、彼らは〈道徳的〉解釈を決して〈寓意的(キリスト論的)〉解釈に従属させるようなことはなかった。要するに、寓意的・キリスト論的解釈は、教会がグノーシスから受けとったものであり、本来の解釈のめざした方向は、倫理的解釈である。

三、宗教改革時代

II、宗教改革時代 1) ルターの場合、この譬えは彼

が一五二九年以後も〈寓意的〉解釈を固守し続けた四つのテキストの一つだとG・エーベリングは指摘した。しかし、このテキストによる一三回（一五二三―一五三七）の説教は、ことさら従来のキリスト論的解釈へ逆もどりすることなしに、テキストの福音的性格を明らかにし得ている。ただロマ書四・七の講解に際して、キリストをわれらのサマリア人とし、人間の状態を半死半生で宿屋の主人に預けられた病人としているのは、〈simul justus, simul peccatus〉とか〈sola gratia〉とかいう彼のテーゼ基礎づけるために、明らかにアウグスチヌスから借用したものに過ぎない。従って、ルターはむしろ可能な限りこの譬えのキリスト論的解釈を撤去し続けたと言うべきである。

2) カルヴァンは、寓意的・キリスト論的解釈に対しては、ルターより厳しい拒否の姿勢をとって言う、「自由意志の擁護者どもがここででっち上げる寓喩は馬鹿馬鹿

鹿し過ぎて一顧の値打もない」と。彼においては、いよいよはつきりキリスト論的解釈が拒否され、背後にあったテキストのキリスト教的性格をとり出そうとする関心がとって代った。

3) カトリックの神学者、J. Gagneaux も、「この譬えを神秘的に解釈しようとする者は、強盗に襲われた人をアダムと結びつけるかも知れない。……しかし、それは注解者の課題を逸脱することである」と言っている。

総じて言えることは、この時期には、キリスト論的解釈が排除され、代りに譬えのキリスト教的性格が未だかつてなかったほど広い場所を占めるに至ったということである。

四、ユーリッヒャー以後

III、ユーリッヒャー以後。ここに至ってキリスト論的解釈の廃棄はさらにゆきわたる。それにとって代った非キリスト論的解釈は、倫理的モティーフによるものと救済論的それとに分類される。1) 前者は、ゴルヴェイツァー等で、隣人愛の普遍性を問題として受けとり、実際の

には敵を愛せよという戒を問題とし、従つてこの譬えを山上の説教と結びつけて解釈しようとする。2) 後者は、レーンハルト等で、「あなたも行つてそのようにしなさい」をマルコ二・五または同二・一一と同じことばとして受けとり、それをゆるしと悔改への召しとして、信仰と冒険への召しとして受けとるとする。3) それとは別にう一つ、このテキストのキリスト教的性格を明らかにしようとする解釈がある。彼らの或る人々 (Ragaz, Loewenich) は、この譬えを、その底によこたわるあらゆるモティーフから自由な、愛の行為への然りとして理解する。

五、結論と反批判ノート

以上の如き解釈史の検証から次のような結論と展望が得られる。

1) 近代の大多数の釈義は非キリスト論的である。他面この譬えのキリスト教的性格を明示しようとする試みは拒まれていない。

2) 解釈方向の多くは、この譬えと山上の説教のいわ

ゆる愛敵章句を関連づけている。

3) 故に、キリスト論的解釈は現代ではアナクロニズムである。むしろこの譬えについては、ボルンカムが「ここには全く違ったの一言も宗教的美辞麗句はない。彼がなすことは、不幸な人のためであつて、神を横目で盗み見たりはしない」と言っているように、倫理的観点にアクセントをおくべきである。

以上のようなモンセレウスキーのすぐれた研究に反批判を加える余裕はない。しかし彼のいわゆる “christologische” な解釈という尺度の矮小化、カルヴァンの解釈をストイシズムとしたバルトへの答えの不十分さ、一面的倫理的解釈の平坂さにユーリッヒャーの再来を彷彿させるなどが問題として残る。私はなおバルトの言う、「あなたも行つてそのようにせよ！」とは「われに従え！」ということだという釈義の一句から立ち去り得ない。